なまえつけてよ

蜂飼　耳

学校からの帰り道のことだ。牧場のわきを通りかかったとき、春花はそこに見慣れない子馬がいることに気がついた。

つやつやした毛並みの、茶色の子馬だ。立ち止まってじっと見ると、目が合った。子馬は、ぱちりとまばたきした。春花は、その美しい目に、吸い込まれそうな気がした。作業をしていた牧場のおばさんが、手を止めて、春花に話しかけた。

「この子、生まれたばかりなの。」

「名前、何ていうんですか。」

思わず、春花は聞いた。

「名前、まだ考えてないの。そうだ、名前、つけてよ。」

一年生のときから、毎日、その小さな牧場のわきを通って通学しているので、牧場のおばさんとは、いつの間にか顔見知りになっていた。でも、あいさつをするだけだ。それなのに、子馬に名前をつけさせてくれるというのだ。

「じゃあ、考えておきます。明日までに。」

「頼むね。」

おばさんと子馬に手を振ると、春花は歩き出した。歩きなれた通学路だ。けれど、まるで知らない道を歩いているような気がしてくる。

名前をつけてと任されるなんて、初めてのことだ。これまでに自分で名前をつけたことがある生き物を思い出す。お祭りのときにすくった大人しい金魚。それだけだ。

どんな名前がいいかな。春花は、頭の中に子馬のまぶしい姿を思いえがきながら、帰り道を歩いた。

そのときだ。道の角から、ふらりと勇太が現れた。弟の陸を連れている。勇太はひと月前に、遠くの町から引っ越してきた。

「今度、同じ組になるの。仲良くしてやってね。」

春花の家へあいさつに来たとき、勇太のお母さんはそう言った。

春花は、はい、と答えたけれど、実際にはどうしたらいいか、分からなかった。話しかけても、勇太

はあまりしゃべらない。でも、陸とは楽しそうに遊んでいる。親しくなるきっかけは、なかなかつかめなかった。

「牧場に子馬がいるんだけど、気がついた。」

春花は聞いてみた。勇太は目を合わせない。ただ、足元を見ている。

「あそこの牧場で子馬が生まれたんだよ。あたし、子馬の名前考えてって、牧場のおばさんから、頼まれちゃった。」

「わあ、すごいね。何てつけるの。」

目を輝かせたのは、陸のほうだ。勇太は顔を上げて、ちらっと春花の方を見た。でも、すぐに目をそらした。

「まだ言わないよ。明日の放課後、牧場のところに来て。そうしたら教えるから。」

「今、教えてよ。今、知りたい。」

陸が早口で言った。陸は二年生だ。

「もう行こう。」

勇太はぷいっと向きを変えて、歩き出した。陸は二、三度春花の方を振り返りながら、勇太について行った。

「何よ、その態度。」と言いそうになったけれど、春花は言葉をぐっと飲み込んだ。

近所のおばあさんが、家の前の落ち葉をほうきで集めて、掃除をしていた。小さいころから知っているおばあさんだ。

「こんにちは。」

春花はあいさつをした。

「お帰りなさい。あれ、春花ちゃん、五年生になって、何だか急に大人っぽくなってきたみたい。」

おばあさんの飼っている猫が、木と木のすき間から現れた。猫は、ぽんすけという名前だ。

「ねえ、おばあちゃん。ぽんすけは、どうして、ぽんすけなの。」

子馬の名前のヒントにしようと聞いてみた。